

新山馨（森林総合研究所 森林植生研究領域 群落動態研究室）

阿武隈山地南部の丘陵部では家畜の放牧が古くから盛んで、古い地図には広く草地が広がっていたことが記されている。また薪炭林利用や椎茸原木、チップ利用などの結果として、様々な林齢や種組成の落葉広葉樹林が分布している地域でもある。戦後はさらにスギ・ヒノキの人工造林地が増え、様々な林分のモザイクな森林景観となっている。群落動態研究室を中心とした研究グループは茨城県北部の北茨城市小川にある小川植物群落保護林に6ヘクタールの長期生態観察用試験地を設定し1987年から継続調査を行ってきた。当初は、できるだけ人手の入らない天然林の構造と動態を明らかにすることを指向し、試験地を中心に多くの成果を上げてきた。しかし、現実の森林は様々な人為影響の歴史的産物であることを、最近は痛感している。空間のスケールアップをしながら、多様な林分を対象に、どのように土地利用の履歴と現在の森林の植物の多様性を結びつけるのか、さらに他の生物群の多様性との相互関係をどのように明らかにしていくかが今後の課題である。